

平成 30 年度

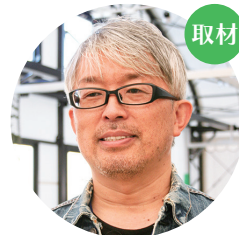
娯楽業

T-Dome79 (都留バッティングセンター)

バッティングセンター、卓球、飲食



代表者名	代表 杉本 朱實	設立年月日	1979年(昭和54年) 10月
所在地	〒402-0053 山梨県都留市上谷 6-12-17		
T E L	0554-43-1598	F A X	0554-43-1598
E-Mail	sayuhide03@gmail.com	U R L	http://ccnet.easymyweb.jp/member/ohno1094
資本金額	—	従業員数	2人



取材

オーナー 杉本 秀樹

テーマ

スポーツテクノロジーを駆使した機器等の導入による新サービスの開発

従来のバッティングセンターの概念を払拭し、効率的・実戦的な練習をしたいという顧客（打者）の要望を新たなサービスとして提供するために、スポーツテクノロジーを駆使した最新機器・システムの開発・導入を行う。

「都留バッティングセンター」は1979年に杉本要さんによって立ち上げられた。当時杉本さんは40歳。仕事を辞め、退路を断っての挑戦だった。「スポーツといえば野球」の時代。少年たちはみな最頂の野球チームのキャップを被り、ナイター中継に一家で一喜一憂していた時代だ。

畑の中にポツンと登場した施設では軟式野球3台（球種ストレートのみ）、ソフトボール2台（球速60キロ～70キロ）のピッチングマシン5台がフル稼働し、順調な船出となる。

創設から40年が経ち、要さん亡き後は妻の朱實さんが後を継ぎ運営していたが、施設は老朽化し故障したままのマシンもあった。この現状と今後を見据えて、息子である秀樹さんが立ち上がる。

施設の存続を見極めるため顧客とのコミュニケーションを図る。子供の頃からの客が今や親子連れでやって来てくれる。幅広い年代の現役選手たちが常連であり、健康のために利用するシニア層など、存続要望の声も多く地域における数少ない野球の練習場所としてのニーズは依然高いことを改めて確認できた。そこで課題を3つにしばり施設再生を計る。「効率的に練習できない。」

球種・球速・コースが固定化されているピッチングマシンでは、決め打ち（どんなボールが来るかが分かるため目をつむっていても打ててしまう）となり、バッティングセンターでは打てても試合では打

てないという結果になってしまう。

スポーツテクノロジーを駆使したピッチングマシンの導入により、ボールの高低を顧客が自由に設定できる。またボールのスピードを一定の範囲内で自由に設定できる。さらに球種はストレート、スライダー、シュート、フォーク、カットボールと選択できる。つまり変化球に対応できるようになる。さらにソフトボールの選択も可能になった。

「投手が投げる実際の映像を基にボールを打ちたい。」ピッチングマシンから出てくるボールを、機械の動きに合わせて打つタイミングを図らなければならない。投手が投げる臨場感のあるバッティングが求められる。

実際の投手の投げる映像から繰り出されるボールを打てる。臨場感溢れるわくわくのあるバッティング練習が可能になった。

「利用料金をキャッシュレスで支払いたい。」

従来の料金の支払いはいは100円硬貨を機械へ直接投入するタイプか、メダル・プリペイドカードを現金で購入するタイプの2つ。現金を持たないキャッシュレス化が拡大する現在、顧客のニーズであるキャッシュレス決済に対応できていないのが現状。

ICカード決済システムを導入。電子マネーによるキャッシュレス化に対応し、1円単位での設定が出来ることで、需給バランスに見合った価格設定が出来るようになった。



● 投手がボールを放つリアルな映像



● バッティング風景少年たち

【対象類型】付加価値の向上（新規顧客層への展開・商圏の拡大・独自性・独創性の発揮・顧客満足度の向上・価値や品質の見える化・機能分化・連携・IT利活用〈Ⅰ〉）
効率の向上（サービス提供プロセスの改善・IT利活用〈Ⅱ〉）
【事業類型】一般型：先端設備等導入計画の認定取得

さあ始まる！本気のバッティングセンター。野球少年はいつまでたってもいくつになっても上手になりたいのだ。

父親が亡くなった当時、杉本さん自身は銀行マンとして働いていた。都留BCの今後をどうするかを、自身の人生も併せて考える。世間では「オワコン」とも言われているバッティングセンターだが、古い慣習を打ち破り、全く新しいBCをつくり上げたら、魅力あるコンテンツとして生まれ変わる可能性がある！と決意。事業承継をすることとする。仕事をしつつ、休日を利用して全国80か所のBCを視察、研究する。経営手法を学び機械設備の調達メーカーを探し、建物の寸法計測・機械設備の内容等々、3年をかけ視察し学んでいった。そして、施設の充実だけでは繁盛店にはなれない。施設と運用、この歯車が正しく回っている店のみが繁盛店となることを学び取った。

「小学生の時からずっと野球はやっていました。もっと上手になりたいといつも思っていました、今でももっと上手になりたいですよ。」と杉本さんは語る。真面目に野球の上達を目指す少年の練習の場として、バッティングセンターを続けて行こうと決意する。そして、もっと上手になりたい大人たち。そういう人がたくさんいる。永遠の野球小僧たちのために。

季節や天候に関係なく快適な温度と換気に管理されるドーム型の施設にこだわった。いつでも打てる場所として。

新名称は『T-Dome79』と名付けた。TはTsuru-city（都留市）、Tent、Tea、Technology（最新技術）を意味するT。79は創業年1979を意識した。



● ここでボールのスピード・球種が生まれます



● 球種・球速を選ぶ

全天候型ドーム型のバッティングセンターは、バッティングと卓球とカフェも楽しめる新たな人気スポットとなる！

全国的にはスポーツテクノロジーを導入したバッティングセンターは、都市圏で導入している同業者もあるが、山梨県内では従前からの古いタイプが多く、山梨県内初となる。ピカーな存在となりそうなニュースポットとして関心を集めている。しかし、杉本さんは

「少年たちのあくまでも練習の場として、決してゲームセンター化はしません。創業時から貫く真面目なスタイルを今後も堅持していきます」

そこで待合エリアも工夫と愛情を注ぐ。まずは卓球台を設備して卓球も楽しめる。エリアのやや高い位置に作られたカウンターシートからは打撃シーンを眺めることができる。さらにゆったりくつろげるソファ席や丸テーブルなど、打撃練習の前や後に、仲間と会話しながら落ち着ける空間が充実している。

あわせて併設されているカフェの存在もたのしい。実は、ご主人の大きな決断に力強く寄り添おうと、奥さんの手づくりによるケーキやプリン、各種ジュースと挽きたてコーヒーが用意されたカフェなのだ。

このほかにも、なにげないBGMや化粧室など、さり気なくこだわった趣味の良い環境と施設に気づ

くだろう。開設研究のために全国各施設をめぐるなかでも刺激を得て、バッティングセンターという括りではない、楽しめるくつろげる空間をもめざしている。

学校などで野球練習を終えてから、個人的にさらに極めたい、確かめたい野球人たちの救世主としてリニューアル登場のT-Dome79。野球人は子どもたちに限らない。お父さんもお兄さん、お姉さんでもある。ここではソフトのピッチングマシンもある。

杉本さんは、今でも上手になりたいと思っているという。全天候型の施設の中で、あと少しもう少し、自分を確かめたい方々、うれしい味方の登場ですよ。

ソフト60キロを体験させていただいた。まったくの未経験者である。5/20、でした。高さも選べてボールの来る位置もわかって、結果5ヒット。これは前に行っただけではあるが。となりで杉本さんが「うまい上手い」とほめ続けてくれた・・・いやいや、でも心の奥の小さなスイッチは点された。誰しもみな試したい確かめたいのだなと。美しくも素敵な場所が登場したのだ。



● ドーム外観



● ラウンジで休憩も